

---

# 青春の肖像 9

山之内 白洞人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青春の肖像 9

### 【Nコード】

N8130F

### 【作者名】

山之内 白洞人

### 【あらすじ】

面影の少女像を今は老い果てた私が振り返ります。

## 第9章

### 9、梅雨の合間

それは露の晴れ間のある日だった。

わたしはその日の放課後寄宿舎に行つて、野梨子たちと遊んでいた。そして、野梨子と偶然二人だけになる時間帯があったのだ。

野梨子は寄宿舎の裏へわたしをいざない、

野梨子はわたしを見つめて、『先生わたしのこと好き?』といきなり聞いてきた。

『ああ、勿論好きだよ』わたしは極力平静を装つてそう答えた。しかし、内心はどきどきで足が震えるような感じだった。

『そう、良かった。わたしも大好きだよ。』

『ほら覚えてる? 橋のところで始めてあつたとき。わたしね、今度来る先生はきつとわたしが大好きになるって想像してたんだ。』

そしたら本当にそのとおりになつたんだ。』

そうだ。わたしもまた、何か予感があつた。

きつと、わたしの妖精が現れることを。

わたしは野梨子を抱きすくめたい衝動を必死にこらえた。

そしていつまでもその黒い瞳を見つめていた。

『わたしの家はね、このむこうの浅間温泉で旅館やつてるんだよ。今度来てね』

『ああそうだね。とまってみたいな。』

『でも、旅館を継ぐのつてあんまり好きじゃないんだ。』

『先生は、おとうさん何やつてるの。』

『うちはね、ちっちゃい工場をやつてるんだよ。僕もそれを継ぐのが嫌でネ。』

それで先生になつちやつたんだ。』

「ふーん、そうなんだ。」

そんなたわいもない会話がそれから延々と続いた。しかし、それは心の通うもの同士の

至福の時でもあったのだ。

ああ、このままずっと野梨子と一緒にいたい。

話は途切れることなく続くのだった。

好きになるのに理由なんてない。

会った瞬間にそれは始まるのだ。

ああこの人だ。心が知っている。

見た瞬間、恋は始まっている。

この人にめぐり合うために産まれてきたのだと。

その時心が納得するのだ。

野梨子はまさにわたしにとって運命の少女だったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8130f/>

---

青春の肖像 9

2010年11月19日07時56分発行